

1 派遣期日 令和5年 8月10日(木)～ 8月11日(金)

2 研修先 学校名 筑波大学附属小学校(会場名)

所在地 東京都文京区大塚3丁目29-1

<https://www.elementary-s.tsukuba.ac.jp>

### 3 研修内容

○ 第86回国語教育全国大会 主催：日本国語教育学会

#### (1) 大会主題

豊かな言語生活を拓く国語教育の創造

—「言葉の学び」への自覚が育つ単元学習の開発—

#### (2) 基調提案 研究部長：藤森 裕治

子どもとともに在る教師の身体を考える

—「言葉の学び」への自覚が育つ学室—

今大会は昨年度の『学習者が「言語の学び」への自覚をもって生きる』という大会主題を引き継ぎ、教師と学習者、教材との関係性について、学習者と同じ地平に伴走者として教師が立ち、協働の問題探究者として教材に向かうという新たな提案がされた。言葉の学びの場でこうした関係性が実現するための問いとして、本大会では「子どもとともに在る教師の身体」とはどのような姿かという問題が提起された。

研究部長の藤森氏は、指導者の発問、声掛けに着目し、それらを情報提供、評価、指示、誘導、復唱、応答、要求等に分類、分析を行った。教師主導の指揮や計画遂行のための誘導的な問いを自制し、発問、声掛けを通して児童の考えを共感的に理解しようと努めることが、児童自らの手で価値ある環境や関係性を構成していくことにつながると述べていた。

#### (3) 授業参観 筑波大学附属小：弥延 浩史

##### ① 単元

第6学年 国語科 「ファンタジーの秘密を探ろう」

##### ② 単元のねらい

本単元では「きつねの窓」を教材とし、複数の作品と関連付けながら、特徴的な構成や表現、非現実の世界で起きる出来事の意味に気付き、ファンタジー作品の秘密として自分が紹介したい方法でまとめ、伝えることができるようにする。

##### ③ 授業の内容

授業は「初読の感想をひとことで表すこと」、「自分の気持ちを表す言葉にすること」を条件とした「読後感」を起点として展開された。読後感の違いごとに分類、整理されたグループで、既習のファンタジー作品とも比較しながら、「きつねの窓」の面白さを「秘密」として、それぞれが考えを伝えあっていた。児童は、比喩表現、色彩表現、スイッチ(異世界への出入り口)を手掛かりに作品の秘密を探し、叙述を根拠として自身の「読み」を交流していた。

弥延先生は、児童の意見を復唱したり、同じ意見かどうか確認したりするだけでなく、「今、話していた〇〇についてももう少し詳しく話してごらん。」、「〇〇さんの意見につなげて話してごらん。」と児童の意見をさらに深掘り、拡張していくような声掛けを徹底していた。児童の意見を分類、統合、整理しながら板書に残し、児童はそれを見ながらさらに話し合いを活性化させていた。最後まで、教師側の読みは伝えず、児童同士で読みの交流を実現していた。

- (4) 研究協議 研究部長：藤森 裕治 桃山学院教育大：二瓶 弘行  
都留文科大：春日 由香 筑波大学附属小：弥延 浩史

① 成果

- ・どの児童も、自分の意見を伝える際、叙述に戻り、根拠として話していた。
- ・児童の思考を整理するための発問と板書の整理が成されていた。
- ・教師が読みを提示しなくとも、主題へとつながる読みの交流がされていた。

② 課題

- ・児童の話し合いの発展によっては、用意していた中心発問を変え、発問内容を児童に寄せるかどうかの判断が必要となる。
- ・児童が自発的に学習を価値付けていくための誘導的な発問がどのくらいできていたかの分析を行う。
- ・読みについて、自分が納得し、仲間を説得するために必要な語彙をさらに増せるよう指導を継続する。

- (5) 校種別分科会 1 佐賀大附属小：中尾 通孝

① 研究主題

学習者にとっての深い学びとメタ認知  
—低学年の劇化活動の実践からの学習者研究—

② 研究のねらい

1～3学年の劇化活動を取り入れた授業において、学習者間でどのような学びが生み出されているかを「深い学び」と「メタ認知」に分けて分析し、学習者がどのようにして、何を学んでいるかを明確にする。

③ 研究の内容

この研究におけるメタ認知とは、「劇を成功させるために、何をすればいいだろう。」といった、自分たちの状況を客観視させることについて指し、「学び方のメタ認知」として定義していた。低学年でも、自身の生活経験と物語を照らし合わせながら、必要な準備を考え、計画を立て、交流しながら活動していた。その中で、興味関心を広げたり、劇に必要な語彙について詳しく調べたりする児童の様子から、「深い学び」につながる実践となったと発表していた。

- (6) 校種別分科会 2 兵庫県赤穂市御崎小：境 佳世

① 研究主題

メタ認知まで導き学びの自覚化を促す  
—1年生による一年間に身につけた言葉の力の確認—

② 研究のねらい

1年生の国語学習において、一年間を見通した学習計画をもとに、付けたい力と付けた力を繰り返し確認することで学びをメタ認知させ、「深い学び」へつながるよう取り組みを分析、考察する。

③ 研究の内容

「自分がどのような力を身に付けたかを認識する力」をメタ認知として定義し、物語教材の音読活動を中心に変容を調べていた。振り返りシートで自身の学びを自覚させたり、教師や保護者のコメントから客観的な意見を得たりすることで、児童のメタ認知を図っていた。振り返りシートは、単元に合わせて内容を変更し、ステップアップさせていくことが、より自身の学びを自覚させることにつながったと分析していた。

#### 4 感想

全国から約1000人近くの教員が集まり、国語教育について熱心な協議が交わされていた。基調提案で提起された、伴走者として教師が立ち、協働の問題探究者として教材に向かうといった「子どもとともに在る教師の身体」とはどのような姿なのか、今後とも探究を続け、自身の指導に生かしていきたい。